山形・馳上（はせがみ）遺跡

1　所在地　山形県米沢市大字川井字元立

2　調査期間　二〇〇〇年（平12）五月～一〇月

3　発掘機関　㈶山形県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　須賀井新人・黒沼幹男・佐藤明日香

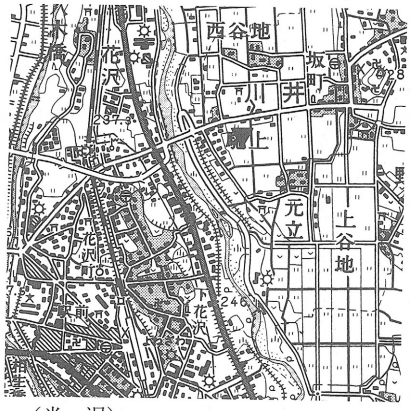
5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　四世紀～六世紀、八世紀～九世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

馳上遺跡は米沢市街地の東部、最上川支流の羽黒川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は約二四〇m、古墳・奈良・平安時代に営まれた集落跡で、現在の地目は水田・畑地である。北西二kmには具注暦の漆紙文書が出土した大浦B遺跡が所在する。調査は、主要地方道米沢高畠線道路改良工事に伴うものである。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・自然流路などである。自然流路は五条確認され、それぞれ時期が異なる。氾濫を繰り返し、流路が変化した様相が窺われる。集落はこれら河道にはさまれた自然堤防状の微高地に立地する。遺物は住居内や河川の堆積層からまとまった量が出土しており、「具」「服」の墨書土器や円面硯の破片なども認められた。



（米　沢）

木簡は自然流路のうちの一条から出土した。この自然流路は南北方向をとり、検出長は約三五mを測る。遺物は最上層からのみ出土している。木簡の年代は、共伴した土器などにより、調査区内では最も新しい九世紀前半を中心とした時期と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)

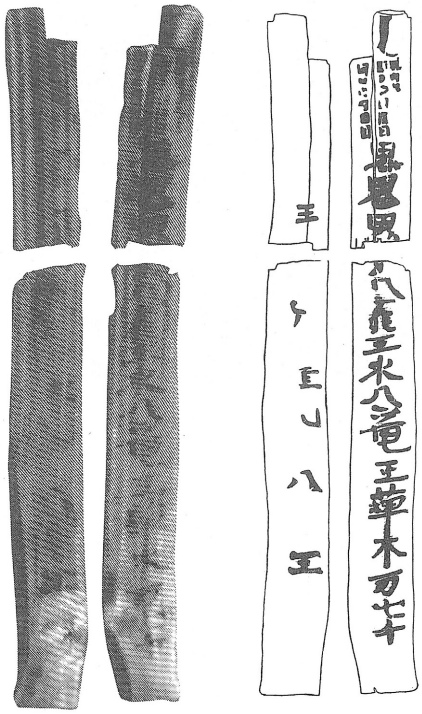
・「□（梵字カ）（符籙）鬼鬼鬼…□八龍王水八竜王草木万七千」

・「□□龍王□□龍王…　□□□□□□（龍カ）八竜王　」

(129＋68)×20×3　011

三断片からなる短冊形の呪符木簡である。上端の一部を欠損するが、上下端とも原形をとどめる。中間部は折れており、文字の残存状況から若干の欠落があろう。表面の文字は比較的明瞭に読みとれるが、裏面の文字は墨の残りが悪く、きわめて不明瞭である。

「龍王」は航海の守護神・雨乞いの神で、かつ自然流路からの出土なので、本木簡は「龍王」に対する河川周辺での祈雨あるいは止



雨の祭祀に伴うものと考えられる。「草木万七千」は、雨による草木の生育を願った表現と推察される。

「龍王」と記された古代の木簡は、群馬県内匠日向周地遺跡出土木簡（本誌第一四号）・藤原京跡右京九条四坊出土木簡（本誌第一六号）など数例のみであり、東北地方では初出土である。

馳上遺跡は、自然堤防を利用した河川と密接な関係にあった集落である。本木簡はそうした歴史的背景の中で捉えられる。

なお、本木簡の釈読にあたっては、山形県立米沢女子短期大学の三上喜孝氏のご教示・ご協力をいただいた。

（須賀井新人）